4 室生寺周辺の行事にみる歴史的風致

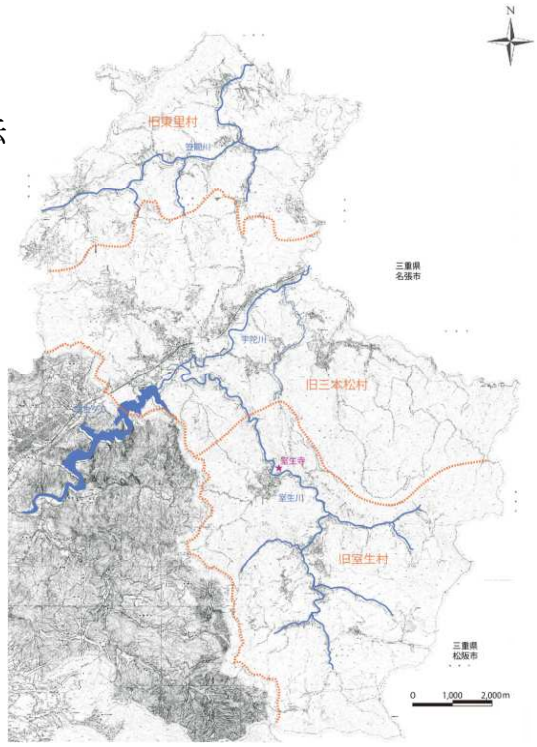
（1）はじめに

宇陀市の東部に広がる旧室生村の区域は山に囲まれ、東西に流れる宇陀川の北と南に集落が展開している。これらは、室生川筋（旧室生村）・宇陀川筋（旧三本松村）・笠間川筋（旧東里村）に分けられる。これらの３つの流域に散在する小扇状地や段丘、高原状の台地は、古くから人が暮らしていたと考えられている[29]。

このうち、室生川流域は火山活動により形成された地形で、その独特な風貌から古代より信仰の対象となり、祈雨・止雨のほか、病気平癒など様々な祈りが捧げられた。中でも吉祥龍穴は霊験あらたかな場所として重要視され、その周辺に室生寺や龍穴神社の境内地が整備されていく。

興福寺僧の山岳修行の場として始まった室生寺は、紆余曲折を経て真言宗の寺院となり、現在でも真言宗の行事を中心に信仰の灯を守り続けている。また、護法神の役割を果たした龍穴神社には秋祭りなどの伝統行事が残り、地域の氏子により四季折々の営みが受け継がれている。

ここでは、室生寺とその周辺で現在も伝わる、以下の活動について紹介する。



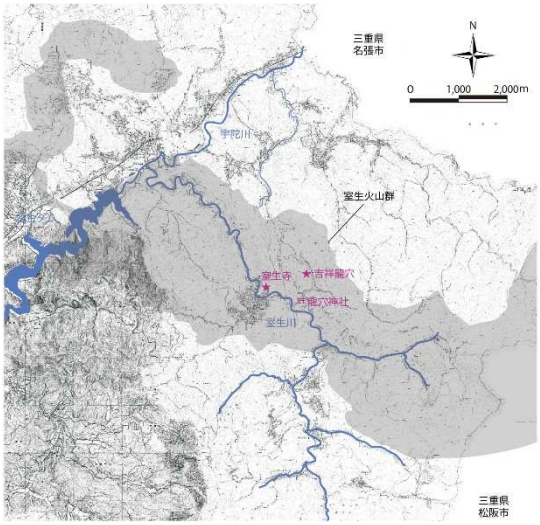
宇陀市における室生の位置図

29 「大字大野字こおじゅ」から縄文式土器や石器などが出土しているほか、上笠間や向渕、三本松で石鏃（やじり）・石屑が見つかっており、縄文時代中期（約 5000 年前）には人の生活があったと推測されている。

宇陀市の東部に広がる室生山地とその周辺は、約 1,400 万年前の大規模な火山活動によりできた火山岩が残り、長い年月をかけて隆起や浸食を繰り返して形成されている。その分布範囲は第 1 章 P13 の図のとおりである。

火山活動により形成された洞窟や独特の岩肌を持つ室生、その地名は「ムロ」・「ミムロ」の意で、太古より神が宿る神聖な地と考えられ、信仰が早くから起こっていた。中でも水源の地として水神信仰が中心となり、雨乞の聖地として認識されるようになった。

ここに、大陸から龍の思想が入り、室生の岩山にできた大きな洞窟に龍が住み、この活動によって雨が降り、様々な願い事が成就すると信じられるようになる。龍の住む洞窟は「龍穴（りゅうけつ）」と呼ばれた。



網掛け部分は室生赤目青山国定公園の範囲

吉祥龍穴

吉祥龍穴周辺では、火山から流れ出た溶岩がゆっくり冷え固まって規則正しい割れ目ができる「柱状節理」がみられる。

『日本紀略』（11 世紀後半から 12 世紀頃、作者不明）によると、弘仁 9 年（819）秋七月丙申（十四日）の条に、「使を山城の貴布禰神社及び、大和国室生山の龍穴等の処に遣わして雨を祈る」とあり、神社の存在は不明だが龍穴の存在は確認できる。

奈良時代の末期から平安時代にかけて、度々祈雨・止雨のための祈禱が行われ[30]、霊験を顕した。この龍穴から南へ 600m の位置に鎮座しているのが「室

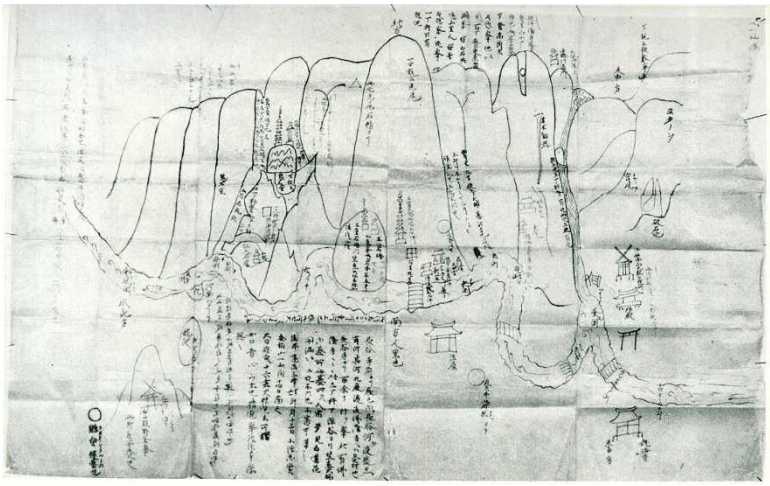
[30] 『日本紀略』では弘仁 8 年（818）「律師伝燈大法師修円を室生山に遣わして、雨を祈る」、弘仁 9 年（819）秋七月、『宀一山年分度者奏状』（承平 7 年（937）4 月 23 日）では天応元年（781）～承平 7 年（937）まで 29 度、朝使、国宰（国司のこと）互いに相参登し祈雨・止雨の祈禱を竜神に致したとある。

生龍穴神社」で、『日本三代実録』（延喜元年完成/源能有（よしあり）、藤原時平ほか）では「貞観 9 年（868）八月十六日、大和国従五位下室生龍穴神社に正五位下が授けられる」とあり、延喜式『神名帳』では宇陀郡十七座のひとつに数えられていた。

たびたび龍穴神社で行われた祈雨等の儀式だが、派遣される使者は仏教の僧による法要であった。『宀一山年分度者奏状（べんいちさんねんぶんどしゃそうじょう）』（承平 7 年（937）4 月 23 日）によると、大きな転機は宝亀年間（770～781）、東宮（皇太子、のちの桓武天皇）の病気平癒を祈るため、浄行僧 5 人を室生山へ派遣し法要を行ったことである。東宮の病は快癒し、霊験のあらたかさが示された。そののちに、国家の安泰を願い、興福寺大僧正賢璟（けんぎょう）が弟子の修円（しゅうえん）とともに創建したのが「室生山寺（龍穴山寺）」である。やや遅れて、寺の東方に社殿が作られ、室生龍穴神社が創祀される。

創建当初の室生寺は、「興福寺別院室生山寺」といわれ、興福寺僧の研学の場、山岳修行の場であった[31]。このころ、中心堂宇として薬師堂（現金堂）が建立されたと考えられている。

中世、室生寺は興福寺の末寺だが真言宗を奉じていた。室生山寺から室生寺へと名称が定着し、11 世紀前半に弥勒堂が建立され、鎌倉時代中期には真言堂（灌頂堂・悉地院・現本堂）および御影堂（大師堂）が建立され、真言密教化が進む。



「宀一山図」（正和 3 年（1314）写、金沢文庫所蔵）

現在の伽藍配置

金沢文庫が所蔵する「宀一山図（べんいちさんず）」（正和 3 年（1314）写）を見ると、金堂・弥勒堂・五重塔と奥の院が描かれ、東には龍穴神社社殿が記されている。川を挟んで向かいには、「南方人里也」とあり、詳細は不明だが既に集落が存在していた

---

[31]室生山寺には、宗派を超えて僧が続々と来山している。空海（真言宗の開祖）の高弟真泰（しんだい）、承和元年（834）に比叡山（天台宗の総本山）から円修と、法相・真言・天台の教行など、充実した山岳修行の場であった。

ことがわかる。

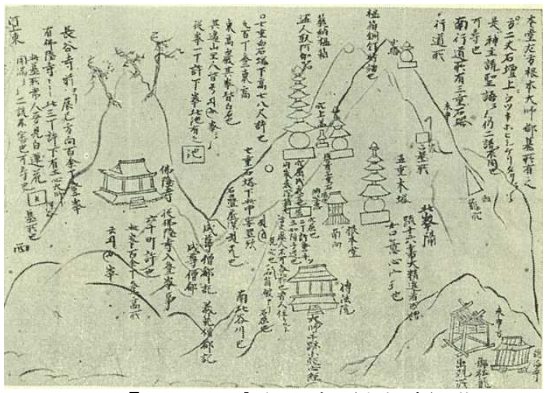
一方で本寺の興福寺は鎌倉時代後半から室町時代にかけて勢力が衰退し、室生寺支配が有名無実化しつつあった。更に南北朝期に入ると豪族となった澤・秋山両氏の台頭が、これに拍車をかけることとなる。

近世に入り、慶長 9 年（1604）から宇陀郡に入部した福島高晴が室生寺長老に興福寺以外の僧を据えようと圧力をかけたことから興福寺との間で紛争が生じた。興福寺が屈する形で解決したが、このときに長老となった真言僧建海が入寂したのちに紛争が再燃し、寺社奉行へ訴状が出される事態となる。訴訟では興福寺側の主張が全面的に認められたが、元禄 7 年（1694）真言僧隆光（りゅうこう）が室生寺を拝領することとなり大きな転換期を迎える。

五代将軍徳川綱吉の母、桂昌院は隆光に深く帰依しており、堂塔の修理のために金 2 千両を寄進したほか、隆光の拝領以来、護国寺末寺としていた室生寺を、新義真言宗豊山派の一本寺（本山から独立した寺）として独立させたのである。さらに、高野山が女人禁制であることから「女人高野」の称を与え、高野山に立ち入れない女性の参詣を受け入れる寺として知名度を高め、室生寺とその周辺に大いに発展をもたらした。

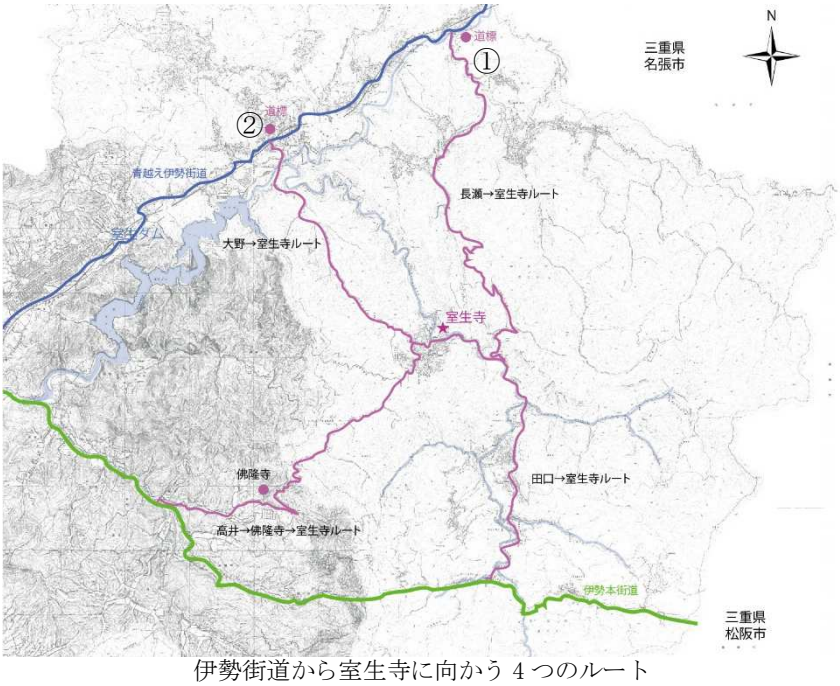
女人高野室生寺は、伊勢街道沿いの名所としても知られるようになり、室生寺への参詣道は四方より四道が整えられた。西方は伊勢本街道の高井より赤埴の佛隆寺を経るもの、北方に青越道の大野より入るもの、東方は三本松の長瀬より入るもの、南は上田口より入るものがある。これらの道にはところどころに町石や道標が立ち、参詣者への便宜を図っていたことが伺える。

室生山一帯には四大門と呼ばれる寺院があり、東門・長楽寺（室生田口元角川）、西門・大野寺（室生大野）、北門・丈六寺（三重県名張市赤目町）、南門・佛隆寺となっている。主要ルートは、佛隆寺から室生寺へ向かう道であったとみられ、『宀一山図』（年代不明）（仁和寺（京都市）蔵）に佛隆寺が描かれるとともに、佛隆寺境内入口の手前に室生寺の方向を示す道標が置かれている。



『宀一山図』仁和寺（京都市）蔵

三本松長瀬にある大師堂と道標



伊勢街道から室生寺に向かう 4 つのルート

①三本松長瀬の道標

②大野の道標

女人高野室生寺は、参詣客でにぎわう平穏な近世を過ごしたが、明治初めの神仏分離・廃仏毀釈の大変革を受けて、龍穴神社と分離させられ一時衰退するに至った。

この衰退から室生寺を復興させたのは、明治 12 年（1879）に入住した丸山貫長（まるやまかんちょう） 住職である。広く浄財を集め、傷みの進んだ堂宇の修復を成し遂げた。

戦後、室生寺は女人高野のイメージと優美な堂宇や仏像の美を求めて多くの人で賑わうようになる。真言寺院として独立以来、豊山派の一本寺（末寺を持たない寺）として存在したが、昭和 39 年（1964）真言宗室生寺派を成立させ、その総本山となり更なる隆盛を見せた。元禄の火災で焼失した仁王門を昭和 40 年（1965）に再興し、威容が整えられた。

室生寺は幾度か大きな自然災害に見舞われている。昭和 34 年（1959）の伊勢湾台風で太鼓橋が流失、平成 10 年（1998）の台風 7 号では倒木により五重塔が大きく破損した。しかしその度に、全国から寄せられた浄財により再興、修復がなされてきた。現在も室生寺は、真言密教の作法に基づく祈りを日々捧げながら、深山幽谷に佇む優美な伽藍に四季折々の美を求め、或いは信仰のために訪れる人々を迎えている。

（２）建造物

長い歴史を持つ室生寺の境内には様々な時期に建立された建造物があり、国宝や国の重要文化財に指定されている。これらの建造物を舞台に、日々のお勤めや行事等が行われている。

（表　室生寺の指定文化財一覧）

No.	区分		指定年月日	名称	員数	年代	備考
1	国宝	建造物	明治30年 12月28日 昭和26年 6月 9日	室生寺五重塔	1基	平安時代初期	
2	国宝	建造物	明治34年 8月 2日 昭和27年 3月 29日	室生寺金堂	1棟	平安時代前期　庇 寛文12（1672）	
3	国宝	建造物	明治34年 8月2日 昭和27年 3月29日	室生寺本堂（灌頂堂） 附　厨子及び仏壇	1棟 1基（各）	鎌倉時代前期　延慶元(1308)	
4	国宝	絵画	昭和53年 6月 15日 昭和54年 6月 6日	板絵著色伝帝釈天曼荼羅図（金堂来迎壁）	1面	平安時代	
5	国宝	彫刻	明治34年 3月 27日 昭和27年 3月 29日	木造釈迦如来立像	1躯	平安時代	
6	国宝	彫刻	明治34年 3月 27日 昭和27年11月22日	木造十一面観音立像	1躯	平安時代	
7	国宝	彫刻	明治36年 4月 15日 昭和27年11月22日	木造釈迦如来坐像	1躯	平安時代	
8	重要文化財	建造物	明治44年 4月17日 昭和55年12月19日	室生寺御影堂 附　旧屋根板 旧裏甲 旧須弥壇床板 旧壁板 板札	1棟 7枚 1枚 1枚 1枚 1枚	鎌倉時代中期	
9	重要文化財	建造物	昭和36年 3月 23日	室生寺納経塔　石造二重塔	1基	平安時代後期	
10	重要文化財	建造物	昭和36年 3月 23日	室生寺五輪塔　石造五輪塔、小五輪塔2基、基壇付	1基	室町時代前期	
11	重要文化財	建造物	昭和54年 2月 3日	室生寺弥勒堂	1棟	鎌倉時代前期　（室町前～中期改造）	

【室生寺金堂】国宝

仁王門を過ぎて「鎧坂」と呼ばれる石段を上ると右側正面に金堂が見えてくる。「宀一山図」（正和３年（1314）写）には根本本堂と記してある。

室生寺金堂

桁行５間、梁間５間、こけら葺、寄棟造で、壁以外は丹塗りで貫・長押を通し、連子窓を嵌め、軒は二重垂木。組物は大斗肘木を用い、正面一間通りに縋破風を付けてある。

金堂側面

この金堂は、奈良時代末期に造られたものを平安造営のときに天井を張り、江戸時代に礼堂を付加した建物で、山岳伽藍の金堂としては最古の遺構であるとして国宝に指定されている。

かつて堂内には、釈迦如来像（国宝）、文殊菩薩立像（重要文化財）、十一面観音菩薩立像（国宝）、薬師如来像（重要文化財）、地蔵菩薩立像（重要文化財）、十二神将立像（重要文化財）が安置されていたが、令和３年（２０２１）に新設された宝物館に納められ、参拝者を迎えている。

【室生寺本堂】国宝

灌頂堂（かんじょうどう）とも呼ばれる。金堂から西北に階段を上ると傾斜地を背後に切石積の基壇があり、その上に桁行 5 間、梁間 5 間、入母屋造檜皮葺のお堂が建つ。

『建内記』所載の後伏見上皇諷誦（ふうじゅ）文によって、延慶元年（1308）に供養されたことがわかる。本堂は大正 13 年（1924）年から大正 15 年（1926）にかけて解体修理が行われた。

室生寺本堂

正大師会、陀羅尼会など室生寺における主要な行事はここを会場とし、各種法要が厳かに執り行われる。国宝に指定されている。

【室生寺御影堂（みえどう）（大師堂）】重要文化財

室生山の最も高い場所にあり、南面して建つ。方三間、宝形造、板葺。屋根の路盤と宝珠が石で造られていて珍しい。鎌倉時代中期の建立とされ、重要文化財の指定を受けている。

御影堂

堂内には、弘法大師坐像が安置され、毎月 21 日の大師会、青葉祭の法要の時のみ開扉し、祭壇に供物が並ぶ。

【室生寺位牌堂】

御影堂と向かい合って建つお堂。懸造（かけづくり）で、桁行 5 間、梁間 3 間、木造、寄棟造、銅板葺。『寺院明細帳』（室生村/明治 24 年（1891））の境内見取図には現在と同じ位置に「常燈堂」の名称で同規模のよく似た外観の建物が描かれており、建物の柱などの部材は相応に古いことから、このころにはあったと推察できる。

位牌堂

大師会や青葉祭の法要の際には、大師堂を向いて僧が並び、拝殿のような形で使っている。

【室生寺護摩堂（ごまどう）（五大堂）】

室生寺寺務所の東方にある。創立は不詳だが、『室生寺縁起』（著者・出版年不明）によれば、この道場

において毎日国家の太平と宝祚（皇位）の長遠を祈念したという。

宝永年中に桂昌院の発願により再建したが、安政4年（1857）に焼失、文久2年（1862）6月22日に上棟した（『室生村史』）と伝わる現在の堂は、方三間、入母屋造檜皮葺、切石積の基壇の上に建つ。『寺院明細帳』（室生村/明治24年（1891））の境内見取図には現在と同じ位置に「五大堂」の名称で同規模のよく似た外観の建物が描かれており、建物の柱などの部材は相応に古いことから、このころにはあったと推察できる。毎月28日の護摩供や初祈禱はここで行われる。

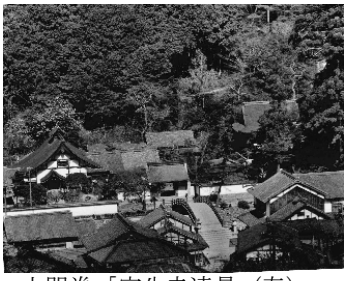
護摩堂

室生寺慶雲殿

【室生寺慶雲殿（客殿）】

室生川にかかる太鼓橋を渡り、正門をくぐって左手に建つ。桁行10間、梁間6間、木造、片側入母屋造、桟瓦葺。曝涼展の会場となるほか、法要のあとの会食や振る舞いの場としても利用している。

写真家の土門拳が昭和21年（1946）～昭和24年（1949）に撮影した室生寺境内の写真に写っていることから、このころには既に建っていたことがわかる。


土門拳「室生寺遠景（春）」
写真提供：土門拳記念館

初祈禱後、ぜんざいの振る舞いを受ける地域の人

【龍穴神社本殿】県指定文化財（建造物）

「宀一山図」（正和3年（1314））によると、「御社南向也竜王現所」と記してある。現在の社殿は、一間社春日造、檜皮葺、周囲には瑞垣を回している。棟札によると慶安5年（1652）春日若宮本殿（奈良市春日野町）として建てた社殿を寛文11年（1671）に当地へ移築したものである。本殿の約800m奥にある吉祥龍穴までが境内地で、この周辺は火山岩により形成された独特の地形を持つことから、聖域として信仰を集めていた。秋の例大祭では、鳥居前が終着点となっており、拝殿の前で獅子舞を舞う。

龍穴神社本殿

【室生下出集会所】

室生寺の太鼓橋から南側の集落に入り、西南に坂を上ると、少し広めの土地があり、道を挟んで向かいに集会所が建つ。

木造つし二階建、桟瓦葺、庇付で、棟の北側に煙出しを設けている。室生村が作成した家屋評価調書によると、調査を実施した昭和 46 年（1971）の時点で築 35 年を経た住宅と記録されている。

現在は、地域の集会に利用するほか、秋祭りでは午前中、最後に獅子舞を舞う場所となっている。獅子舞の一行はこの建物に上がり、昼休憩を取ったあと徒歩で移動し、午後は室生寺太鼓橋を起点に出発する。

室生下出集会所

【橋本屋旅館】

室生寺の太鼓橋袂（たもと）にある旅館。木造二階建、片側入母屋造、桟瓦葺。川の方向に入母屋の妻を向け、出入口の庇にも 2 箇所の入母屋を設けている。

室生村が作成した家屋評価調書によると、本館部分の建築年代は不詳、昭和 46 年（1971）に新たに客室を増築している。本館も増築部分も、現在の規模や仕様は家屋評価調書の内容とほぼ変わらず、外装の部材は相応に古びている。

橋を渡ればすぐ室生寺境内に入ることができる好立地にあり、客室からは室生川越しに室生寺を眺めることができる。法事などの仕出しのほか、室生寺の参詣客が主に利用する。

橋本屋旅館　外観

（３）活動

【龍穴神社秋祭り】

祭神は水の神である高 龗 神（たかおがみのかみ）、以前は旧歴 9 月 15 日に行われていたが、現在は月遅れの 10 月 15 日に近い日曜日に行われる。五穀豊穣と水の神への感謝を捧げるためのお祭りで、右写真のような隊列を組み、集落と対岸の室生寺境内を通り、龍穴神社まで決められた場所で獅子舞を舞ながら練り歩く。

室生の集落は 5 つの組にわかれ、それぞれに頭屋（とうや）がいる。その総指揮をオクモンド、副総指揮をクモンドと呼び祭事を取り仕切る。このほか、14 人の宮本衆が居り、各種神事に奉仕する。

最初に 8 月 1 日に八朔座が行われ、地蔵院に宮本衆が集合、秋祭りの相談と終わって直会がある。10 月 9 日には新米の藁と縄を使い、龍の形を綯（な）う。これを天神社の拝殿横にある大銀杏の木に吊り下げるため、運びあげる。鱗のかわりに紅葉の葉をへばりつけ、御幣をところどころに垂れさせる。祭典を行い、木に縄をぶら下げたまま帰る。

秋祭りには宵宮があり、神社役員にて神社前の杉の木に勧請縄を吊り、祭典を行う。暗くなると子供太鼓台が出される。笛と太鼓の音と子供たちの掛け声で、賑やかに集落内をまわり、お祭り前夜を盛り上げる。

お祭り当日、オヘサシ（日の丸扇 3 本、木綿一反、白米三合、新穂米ひとつかみをぶら下げたもの）を立て、根本にお神酒と洗米を供えて祭る。頭屋宅は、右の写真のように注連縄が掛けられ、獅子舞が来るのを待つ。

朝から 5 箇所の集会所で餅つきがあり、獅子舞は集会所（あるいは頭屋（とうや）宅）を回り、餅つきをする横で、舞を舞う。このときに作られる神饌をスコウといい、笠餅御供・柿・粽・芋頭・押餅など古風で伝統的なものが作られる。

お渡りのルートは集落の最も高い所から下っていく。

大銀杏に吊るした龍
（令和 4 年 12 月撮影）

昭和 40 年（1965）頃の
頭屋宅前（写真提供：奥本氏）

1960 年代の秋祭りの様子

右手前の人が持っているのが
オヘサシ。昭和戦後

①菅間出垣内集会所から出発して、②荷之出集会所、③西出会館、④広垣内集会所、最後に⑤下出集会所でお昼休憩に入る。

拝殿前での獅子舞

午後より、室生寺境内に入る。その際、龍穴神社総代が「７度半の使い」の所作をし、通常は閉門されている「赤門」が開けられ、そこで室生寺座主がお渡りの一行を出迎える[32]。

獅子舞は天神社拝殿（金堂・弥勒堂の東）の前にて舞い、そのあとは太鼓橋を渡って旧参道を通り、龍穴神社の境内へ戻る。

神社境内に入るとお祓いをし、拝殿にて神事が行われる。そのあと、子供神楽、大人による獅子舞の奉納が行われ、御供まきをする。最後に抽選会があり、秋祭りのすべての行程が終わる。この祭は随所に古風な作法が残り、また神仏習合（日本古来の神と外来宗教である仏教を結び付けた信仰のこと）の祭礼としても特質がある。

【室生寺の行事】

室生寺では、毎月の祈禱、御影供、護摩供など、真言宗寺院としての行事が行われている。

【初祈禱】

護摩堂での初祈禱

1 月 6 日 13 時から、護摩堂において初祈禱が行われる。その名の通り、新年最初に行われる法要で、『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和 41 年（1966））では「室生寺の護摩堂で初祈禱にあたるハツゴマが、管長はじめ僧侶出仕のもとに厳修される」とあり、このころには既に行われていた行事である。檀信徒が集まり、導師を中心に加持祈禱が行われる。このとき、護摩焚きをするが、燃え盛る炎が龍の形に見えると、いい一年を過ごすことができると言われている。

【春の彼岸会・大師会】

春の彼岸会・大師会
階段を上る僧侶たち

大師会は毎月 21 日に開催される弘法大師の月命日である。奈良県庁文書の『明細帳』（明治 25 年（1893）/室生村/）によると、「会式日　毎年一月廿一日　三月

32 安政 6 年（1859）に護摩堂で火災があった際に室生の村人たちが消火活動に尽力したおかげで赤門が残った。その感謝の意を表するため、永代のお礼として秋祭りの日だけ、寺主が赤門を開扉し、その前に正座して出迎えるようになったと伝わる。

廿一日　七月廿一日」とあり、このころには行われていた行事である。3 月 21 日 10 時から、奥の院に続く階段を僧侶が列をなして登り、位牌堂に上がると御影堂に向かい法要を行う。

続いて、位牌堂の正面に並び直し、彼岸会法要を行っている。

最初は御影堂を向いて法要を行う。

【正御影供養】

4 月 21 日 10 時から本堂にて、弘法大師の命日の法要を行う。室生寺ではこの日が最も大きな行事と位置づけられ、お稚児さんや檀信徒が列をなして本堂へ入る。(2020 年度以降はコロナ感染防止のため、お稚児さんの行列はとりやめとなった。)

『室生の民俗』(松本俊吉ほか/昭和 41 年（1966)）によると「室生寺の大会式」とされており、当時は縁店（エンミセ）が境内に並び、多くの参詣客で賑わった。右の写真は、昭和 45 年（1970）の集合写真。

続いて位牌堂正面に向きを変えて法要を行う

正御影供、僧の入場

【青葉まつり】

6 月 15 日　弘法大師の生誕を祝い、営む法要。奥の院の位牌堂から御影堂に向かい、法要を行う。

法要の際に散華した和紙製の蓮弁は、参加者に記念のお土産として渡される。

昭和 45 年（1970）のお稚児参りの様子。
出典/『桜井・宇陀の 100 年』(岩井宏實　監修/2006 年)

【陀羅尼会（だらにえ）】

12 月 12 日 13 時～、真言宗中興の祖、興教大師の命日に行う法要。本堂内陣で行われ、厨子の扉に興教大師の肖像画が掛けられ、声明、散華などが行われる。檀信徒は外陣に座り、法要の様子を見守る。

陀羅尼会

【月々の法要】

3 日　弁財天供（弁天社）弁天社に祭られた弁財天のための法要。

21 日　弘法大師御影供（奥の院御影堂)、弘法大師

の月命日の法要を行う。『室生の民俗』（松本俊吉ほか/昭和 41 年（1966））に「室生寺では同日（筆者注、一月二十一日）奥の院で初大師の御影供法要があり」との記述から、このころには行われている行事である。

24 日　地蔵供（地蔵堂）、室生川対岸の斜面中腹に建つ地蔵院にて、地蔵菩薩の法要を行う。『寺院明細帳』（室生村/明治 27 年（1894））によると「會式　毎年八月廿四日」と記載があり、このころには行われている行事である。

28 日　不動明王護摩供（護摩堂）、寺務所の横に建つ護摩堂にて、不動明王の護摩供を行う。奉納された護摩木を大檀具の上で焚くほか、屋外にて古札等を焚き上げる。

地蔵供

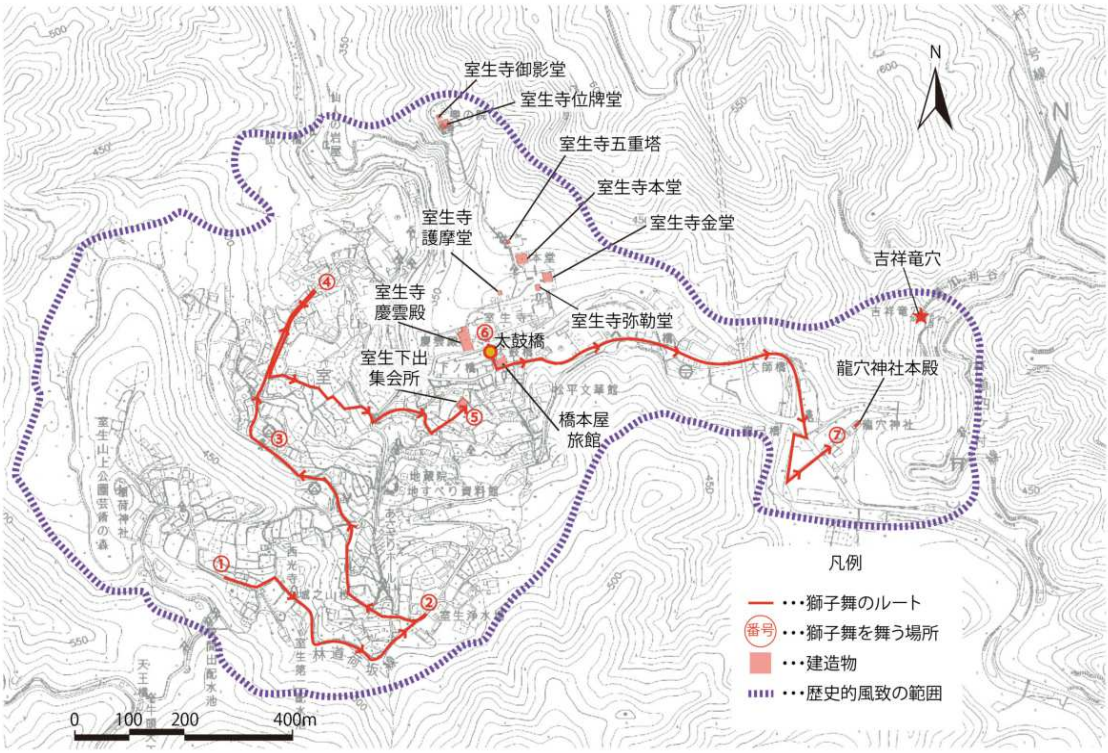
不動明王護摩供

（4）おわりに

火山活動により形成された特徴的な地形に神が宿ると考えられ、龍神の棲む聖なる場所とされた室生の吉祥龍穴。水を司る神として奈良時代末期より祈雨・止雨・病気平癒等の祈りが捧げられ、その願いに応え、霊験あらたかな場所として信仰を集めてきた。

龍穴と目と鼻の先の場所に、僧の山岳修行の場として開かれた室生寺では、長い歴史の中で真宗寺院としての行事が定着し、現在でも各種法要が続けられている。護法神として境内地が整えられた龍穴神社は、長く室生寺とともにあったが、神仏分離令以降は村社として室生の村人が守ってきた。今に受け継がれた秋祭りの様子から、分かたれた寺と神社がかつては一体的なものであったことが読み取れる。

これら一連の活動と、建造物とが一体となり、室生寺周辺の歴史的風致を形成している。



室生寺周辺の行事にみる歴史的風致

参考文献

『古寺巡礼　奈良 6　室生寺』（網代智等・河野裕子　著/平成 22 年（2010）10 月）

『室生村史』　（室生村史編集委員会　編/昭和 41 年（1966）2 月）

『女人高野　室生寺のみ仏たち』（東京国立博物館・奈良国立博物館　編/平成 11 年（1999）7 月）

コラム３　宇陀市内の地蔵盆

人々から親しみを込めて呼ばれる「お地蔵さん」とは地蔵菩薩のことで、仏教においては現世で仏が不在の間、六道（地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道）すべての世界に現れて人々を救う菩薩であるとされる。子孫繁栄や傷病の治癒成就など、様々な祈念が捧げられているが、特に子供を守る菩薩として信仰を集めてきた。

宇陀市内では、室生の地蔵院のように木彫の像を安置してお参りする事例もいくつかあるが、道祖神（集落の守り神）として集落の境目にお地蔵さんが鎮座している事例をよく見かける。その多くは石像で、覆い屋の下に安置され、朝と夕方に、線香やお水を供え、祈りを捧げる人の姿がある。

年に一度、地蔵盆が市内各地で開催され、お地蔵さんの前に子供が好きなお菓子・ジュース・果物が供えられ、法要が行われる。開催日は、殆どの集落は８月24 日またはそれに近い休日だが染田は７月 24 日、関戸は９月 15 日に近い日曜日に行われる。

周囲を提灯で飾る

テントを張る

お参りに来る子供たちを待つ

お供えと笹を飾る

笹の飾り

寺院のお地蔵さんの地蔵盆

五十軒の地蔵菩薩

安産寺の地蔵盆